

日本語学習者が接する授業内インプットと 教室外インプットの比較

A comparison of inputs learners exposed between in and outside the classroom.

藤田裕一郎 立部文崇

要旨

本研究では、教室内で使用される和語動詞の使われ方が教室外での使われ方と異なるか、教師の授業内発話、教師の作例、母語話者の日常会話を対象に比較、検討した。その結果、教師の授業内発話は授業内容の影響により、偏りが見られるが、作例とともに、母語話者の日常会話同様、幅広い用法の使用が見られ、大きく異なるものではないことが分かった。

キーワード 日本語教師発話コーパス 日本語日常会話コーパス ティーチャートーク 和語動詞

1. はじめに

教室外の実際の言語環境を積極的に利用することができない初級レベルの日本語学習者（以下、学習者）においては、ティーチャートークそのものが学習者の言語習得に直接影響を与えるインプットとして作用している可能性があると考えられる（伊藤, 1998）。ティーチャートークは、語彙や構文を学習者に合った適切なものにするなどの特徴を持ち（岡崎・長友, 1991）、母語話者の自然な発話とはやや異なる側面を持つ。しかし、学習者が教室内で受けるインプットと教室外で受けるインプットが同質であれば、教室内のインプットは教室外のインプットを理解するための橋渡しになる可能性があると考えられる。一方、両者に著しい違いがあるならば、学習者は教室内で受けるインプットを教室外の言語環境へ応用するのが難しいかもしれない。

そこで、本研究では、汎用的な語彙（基礎的な和語動詞）の使い方がティーチャートークと母語話者の自然な発話で異なるかどうか比較、検討した。

2. 調査

「聞く」「出る」「出す」「なる」「持つ」の5つの動詞の用法について、日本語教師の発話を日本語教師発話コーパス（立部・藤田, 2015）、日本語教師の例文を4名の教師による作例、母語話者同士の発話を日本語日常会話コーパス（小磯他, 2019）によって調査した。

分析にあたって、『デジタル大辞泉』を搭載したオンラインのgoo国語辞書による用法の分類にしたがい、それぞれの分析対象において使用された動詞がどの用法で使用されたか分類した。なお、日本語日常会話コーパスは分析対象の動詞の発話数が膨大であったため、無作為に抽出した200例を分析対象とした。

3. 結果と考察

表1は「聞く」の分析結果を示したものである。実数は発話数全体における割合で括弧内の数字は発話数である。

表1 汎用的な語彙の用法分析（聞く） % (n)

	1	2	3	4	5	6	7	8	その他	合計
日教コ	2.6 (9)	63.6 (222)	0 (0)	0.3 (1)	33.5 (117)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	100 (349)
作例	5 (1)	40 (8)	20 (4)	5 (1)	30 (6)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	100 (20)
日会コ	12.5 (25)	10.5 (21)	28.5 (57)	4.0 (8)	41.0 (82)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3.5 (7)	100 (200)

1列目の数字はgoo国語辞書による用法の分類で、1は、音・声を耳に受ける。耳に感じ取る。「物音を一・く」。2は、注意して耳にとめる。耳を傾ける。「名曲を一・く」。3は、話を情報として受け入れる。「一・くところによると」。4は、人の意見・要求などを了承し、受け入れる。「親の言いつけをよく一・く」。5は、尋ねる。問う。「道を一・く」。6は、感覚を働かせて識別する。⑦（聞く）においのよしあしや種類を鼻で感じ取る。においをかぐ。「香（こう）を一・く」、④（「利く」とも書く）酒の味のよしあしや種類を舌で感じ取る。味わい試す。「酒を一・く」。7は、当て

て試してみる。「板の厚さに一・いて釘を打つ」。8は、釣りで、当たりの有無を確かめるために、仕掛けを引いたり軽く竿を上げたりしてようすをみる、である（例文など一部省略した）。そして、判別が難しく分類できなかったものなどをその他とした。左の列の「日教コ」は日本語教師発話コーパス、「作例」は教師による作例、「日会コ」は日本語日常会話コーパスを表す。

用法6、7、8はいずれにおいても使用が見られないため、日常会話などではあまり使用されない用法であると推測される。1から5の用法について見てみると、日本語日常会話コーパス、すなわち母語話者同士の日常会話を見ると、用法ごとに発話数の多寡は見られるものの、特定の傾向や大きな偏りは見られず、さまざまな用法が幅広く使われていることが窺える。一方、日本語教師発話コーパス、すなわちティーチャートークを見ると、2の用法の発話が多い。これは、聴解の授業で「CDを聞いてください」とか、「もう一度聞きましょう」などの発話が多く見られたことが影響していると考えられる。その他の用法の使用も見られるが、やや偏りがあるように見受けられる。一方、作例は割合に差は見られるものの、母語話者同士の日常会話に似て、さまざまな用法が使われていることが分かる。

表2は「出る」の分析結果を示したものである。

表2 汎用的な語彙の用法分析（出る）

% (n)

	1	2	3	4	5	6	7	その他	合計
日教コ	16.9 (13)	18.2 (14)	14.3 (11)	9.1 (7)	27.3 (21)	11.7 (9)	0 (0)	2.5 (2)	100 (77)
作例	30.0 (6)	15.0 (3)	15.0 (3)	0 (0)	5.0 (1)	30.0 (6)	5.0 (1)	0 (0)	100 (20)
日会コ	9.5 (19)	5 (10)	33.5 (67)	14.5 (29)	13.5 (27)	8.5 (17)	8 (16)	7.5 (15)	100 (200)

1は、ある範囲や中から外の方へ動き移る。㊦そこから外へ行く。2は、㊦その所、起点から移動を始める。そこから出発する。「今から駅をでる」。3は、㊦隠れていたもの、中に入っていたものなどが、表に現れる。現れて見えるようになる。姿を現す。「月がでる」。4は、㊦ある仕事をするために特定の場所にのぞむ。行事、集まりなどに加わる。「会議にでる」。5は、(掲示・掲載したり、ある所に持ち出したりして) 広く人に知られるようにする。「テレビにでる」。6は、あらたに生じる。㊦自然現象・出来事などがおきる。発生する。「霧がでる」。7は、与えられる。㊦発令されたり、支払われたりする。「許可がでる」、である（例文など一部省略した）。

日本語日常会話コーパスの結果を見ると、「聞く」同様、用法ごとに発話数の多寡は見られるものの、特定の傾向や大きな偏りは見られない。同様に、日本語教師発話コーパスでも発話数の多寡は見られるものの、特定の傾向は見られないようである。また、教師による作例は1と6にやや偏りが見られるが、幅広い用法が使用されている点は共通している。

表3は「出す」の分析結果を示したものである。

表3 汎用的な語彙の用法分析（出す）

% (n)

	1	2	3	4	その他	合計
日教コ	37.7 (66)	12 (21)	2.3 (4)	42.9 (75)	5.1 (9)	100 (175)
作例	85 (17)	10 (2)	5 (1)	0 (0)	0 (0)	100 (20)
日会コ	22.5 (45)	44.5 (89)	9 (18)	20.5 (41)	3.5 (7)	100 (200)

1は、自分の範囲内のものを外の方へ動かす。㊦ある所の中から外部へ移す。「小鳥をかごから一・す」。2は、㊦隠れているもの、しまっていてあるものなどをおもてに現す。人目に触れるようにする。「二の腕を一・す」「ぼろを一・す」㊦蓄えてある力などを外に示す。「実力を一・す」。3は、新たに存在させる。㊦新しく発生させる。生じさせる。「芽を一・す」「ぼやを一・す」㊦味・味わいを生じさせる。「うまみを一・す」「つやを一・す」。4は、(動詞の連用形に付いて)㊦そうすることによって外や表面に現れるようにする意を表す。「しぼり一・す」「見つけ一・す」㊦その動作を始める意を表す。「降り一・す」「笑い一・す」、である(例文など一部省略した)。

日本語日常会話コーパスの結果を見ると、2の用法が突出して多く、2ほどではないものの、1、4も多い。日本語教師発話コーパスは1、4の用例が突出して多く、2については他に比べれば多い。一方、作例は1が突出して多いことは同様だが、2、4は少ない。

表4は「なる」の分析結果を示したものである。

表4 汎用的な語彙の用法分析（なる）

% (n)

	1	2	3	4	5	6	その他	合計
日教コ	0 (0)	83.7 (344)	4.1 (17)	2.4 (10)	0 (0)	0 (0)	9.7 (40)	100 (411)
作例	0 (0)	60 (12)	40 (8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	100 (20)
日会コ	1 (2)	74.5 (149)	8.5 (17)	1 (2)	2.5 (5)	0 (0)	12.5 (25)	100 (200)

1は、物事ができ上がる。実現する。成就する。「ついに五連覇が一・る」。2は、今までと違った状態・形に変わる。「氷が水に一・る」。3は、㊦ある時分・時期などに至る。「夜に一・る」「結婚して一〇年の一・る」。4は、ある働きをする。作用する。「不用意な発言が紛糾のもと一・る」。5は、許すことができる。許して、よいとする。「負けて一・るものか」。6は、その人によってつくられる。「名工の手に一・る茶碗」。7は、全体がそれによって構成される。「前編と後編とから一・る」。8は、他からその恩恵を受ける。「先輩の世話に一・って就職する」。9は、将棋で、王将・金将以外の駒が、敵陣三段目以内に入ったとき、また、そこに打ったそれらの駒が動いたとき、裏返しになり、飛車・角行(かくぎょう)は本来の働きのほかに金将・銀将の働きをあわせもち、他の駒はすべて金将と同じ働きをするようになる。10は、役や位につく。任命される。「四位にも一・るべき年にあたりければ」。11は、落ちぶれる。なれの果てになる。「入道かたぶけうどする奴が一・る」。

れる姿よ」。12は、酒が飲める。上戸である。13は、尊敬の意を表す。…なさる。「お休みにー・る」。14は、非常に高い敬意を表す。…なさる。…になる、である（例文など一部省略した）。なお、6から14の用法はいずれにおいても使用数が0だったため、7から14は表から削除した。

日本語日常会話コーパスを見ると、2の用法が突出していることが分かる。これは日本語教師発話コーパスも同様である。作例も他のコーパスほどではないものの、やはり同様に2の用法の使用が際立って多い。

表5は「持つ」の分析結果を示したものである。

表5 汎用的な語彙の用法分析（持つ）

% (n)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	その他	合計
日教 コ	13.3 (19)	64.3 (92)	9.80 (14)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	12.6 (18)	100 (143)
作例	35 (7)	15 (3)	40 (8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	10 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	100 (20)
日会 コ	42.0 (84)	19.0 (38)	22.0 (44)	1.5 (3)	1.0 (2)	2.5 (5)	4.5 (9)	1.0 (2)	2 (4)	4.5 (9)	100 (200)

1は、手にとる。手の中ににぎる。「重たい荷物をー・つ」「右手にペンをー・つ」。2は、身につける。たずさえる。携帯する。「財布をー・たないで出かける」。3は、所有している。また、自分のものにする。「別荘をー・つ」。4は、受け持つ。担当する。「重要な役目をー・つ」。5は、自分のものとして引き受ける。負担する。「責任をー・つ」。6は、身に備える。ある性質・状態などを有する。「ピアニストの素質をー・つ人」。7は、心の中にい置く。「悩みをー・つ」「大きな夢をー・つ」。8は、場などを設ける。設定する。「党首会談をー・つ」。9は、長くそのままの状態を保ち続ける。もちこたえる。「夏場でもー・つ食品」、である（例文など一部省略した）。

日本語日常会話コーパスを見ると、1の用法が最も多く、2、3も多い。日本語教師発話コーパスでは2の用法が最も多いが、1、3も多い。作例は1、3の用法が多いが2の用法もほかの用法に比べれば多い。

これらの結果から、母語話者同士の日常会話では、さまざまな用法が使われていることが分かった。また、授業内の発話や教師が作成する例文では、授業内容などにより使用に偏りは見られるが、母語話者同士の会話と同様に幅広い用法の使用が見られた。これらのことから、汎用的な語彙の使い方については学習者が教室で受けているインプットと日常会話で受けるインプットに極端な差はなさそうである。

4. まとめ

本稿では、学習者が教室内で受けるインプットの質が教室外で受けるインプットの質と同質であるか異なるか、使用された和語動詞の用法に着目し、調査した。その結果、教室内で受けるインプットには、授業内容などによる影響は見られるものの、母語話者同士の日常会話同様、幅広い用法の使用が認められた。これらの結果から、1) 和語動詞の使われ方に関しては、教室で受けるインプットは、教室外で受けるインプットと大きな変わりはなく、教室内外は、同じように自然な

インプットを受けることができる。2) 日本語教師は、場面・文脈の影響の大きい和語動詞の使い方まではコントロールすることはできないという2点が示唆された。ただ、2)については、本調査では検証が不十分であり、詳細については、今後の課題としたい。

参考文献

伊藤早苗 (1998) 「初級日本語クラスにおけるティーチャートーク:教師の質問はどのような学習者の発話を引き出しているか」『北海道大学留学生センター紀要』, 北海道大学留学生センター, vol.2, pp.103-115.

小磯花絵 (2018) 「日本語日常会話コーパス」

<https://pj.ninjal.ac.jp/conversation/cejc-monitor.html>.

岡崎敏雄・長友和彦 (1991) 「日本語教育におけるティーチャートーク —ティーチャートークの質的向上に向けて—」『広島大学教育学部紀要』, vol.2, No.39, pp.241-248.

立部文崇・藤田裕一郎 (2015) 「日本語教師発話コーパス」<http://www.corpus-ft.com/>.

goo 国語辞書 小学館 <https://dictionary.goo.ne.jp/jn/>.